

**Libron, Fernand et Clouzot, Henri. Le corset dans l'art et les mœurs du XIII<sup>e</sup> au XX<sup>e</sup> siècle.** Paris, F. Libron, 1933. 39.5×28.7cm <383. 135-L>

Hiler p. 544

芸術と風俗を通して、コルセットの歴史について語ったものであり、高度な印刷技術を駆使したイラストを数多く含む豪華本である。総計800部の限定出版で、このうち、No. 1～No. 25まではオランダ紙が使われており、元来は本文の他に25枚の挿画が添えられている。No. 26—No. 800は、アルシュ (Arche) 紙製である。また、この他に犢皮紙版 (IからLXXX) と上質の日本紙 (Japan impérial) による記名入りの5版、計80部が非売品として出版されている。なお、本書には第108版の刻印がある。

女性の服装史を語る時、本書が出版された1933年ごろまでには、ドレスやコルサージュにラインとフォルムを与えた衣服の内側について、必ずしも十分な研究がなされていたとはいえず、本書は、最初にコルセットの歴史を学問的にまとめたものとして高く評価される。ルロワール (Maurice Leloir) は、本書に多くの助言を与えており、また、本書の基礎となったのは、その死のために未完成のままであったメンドロン (Maurice Maindron) の研究である。

著者の一人 F・リブロン (Fernand Libron) はパリ・コルセット製造組合理事の職にあり、コルセットに関して深い専門的知識を持っていた。また、もう一方の著者 H・クルゾーは、1920年以來ミュゼ・ガリエラの館長で小説家、美術批評家としても知られており、二人の専門的かつ美術・哲学的方面からのアプローチは、本書をより興味深いものとしている。また、フランス・アカデミー会員であり政治家であったバルトーは当時「現代書籍」の会長を務めており、リブロンとの個人的友人という関係から本書に序文を寄せている。

人為的造形美、すなわちボードレールの表現を借りれば、「女性のうつろいやすく、はかない美をとどめるために、そして、それを神格化するために考え出された様々な工夫」であるコルセットの歴史はフランスにおいて、13世紀から今日に至る700年間の間、各々の時代風俗と精神状況、そして美的趣向の移り変わりに伴い、どのように展開されて行くのか？

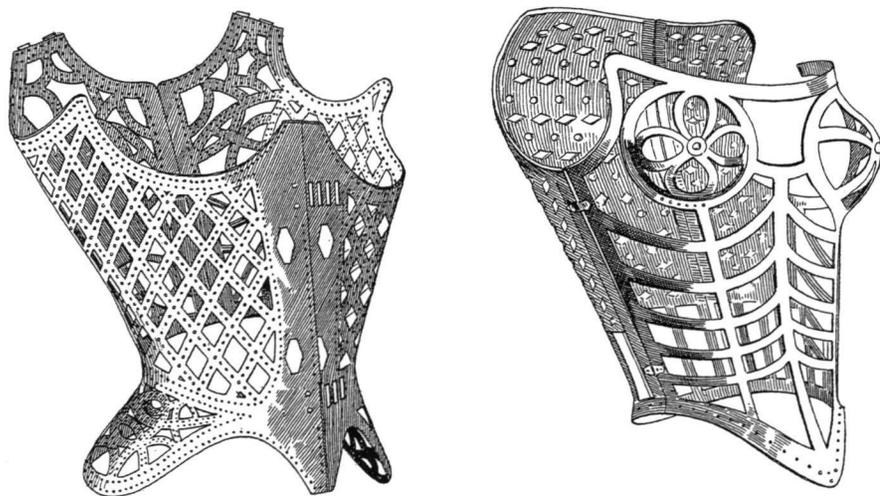
ここで、コルセットとは「胸部と胴部をカバーし、その時々流行に従ってウェストを細く締め上げ、そして下げ、あるいは自然な位置に置くためになされた種々の工夫」と定義されている。

対象となった年代は、13世紀以降、現代までである。なぜなら正確で真実を伝えている資料のみを取り扱うという意図からであり、13世紀以前についての資料はほとんど現存しておらず、正確には何も分っていないといっても、過言ではない。

13世紀から17世紀末までは、風刺文・詩・挿画の解説などのみが主な資料源であり、17世紀以降においては有力な手掛りとなり得る絵画や素描、彫刻は、キリスト教的禁欲主義思想が支

配的だったこの時代までは、女性の下着についての描写を避けているため、ほとんど参考にすることができない。また裏付けのない興味本位の一般的作品は除外するよう注意が払われている。

18世紀以降では、文学、美術（絵画・彫刻・版画）そして現存する実物など豊富な資料が得られたが、1830年以降では、モードがめまぐるしく変化するのに伴って、コルセットもその外観、形、材質共に非常に多くの新型が現われた。しかし、工場やコルセット屋が作った数知れない変り型にこだわりすぎることはないよう、本書は全体的なシルエットとその時代の女性の理想的姿態とを把握するのを第一義としている。（深井）



鉄のコルセット いずれも16世紀末